

『グローバル天理』第7号（通巻19号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「「国際の安全保障」から「人間の安全保障」へ」

近年国連の平和の概念が拡大・変化し、安全保障は国家から人間に焦点が移っているという。国家の安全と繁栄を課題とした時代から、国家を超えた人間同士の安全と繁栄を課題とする方向に、世界の眼は向き始めている。

荒川善廣 「「元の理」の探究（4） 混沌からの創造 [1]」

『旧約聖書』の「創世記」に見られる、神による天地創造は、しばしば「無からの創造」と言われている。西洋思想は、この「無」をまったくの虚無と解する傾向にあったが、「創世記」を素直に読めば、はじめに前提とされている状態はむしろ「混沌」である。「混沌」は、あらゆるものが互いに混入し、融合して無差別であるという状態を指している。この「混沌」は、「元の理」における「どろ海」にきわめて類似しているが、そこから神によって始められた創造活動は、必ずしも同じ方向に展開していったわけではない。

北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（4） 地政学（ゲオポリティクス）再考」

冷戦以後の世界の紛争地域を全体的に望見してみると、一つの絵が見えてくる。旧ユーゴスラビア、旧ソ連の中央アジアの共和国群、アフガニスタン、朝鮮半島……いずれも周辺諸国にとって死活の地域である。こうした問題を研究していたのが長い間タブー視されていた「地政学」である。紛争を分析するにはどうしてもこの学問の力が必要だ。そこで今回は、政治的現象と自然の地理的条件を組み合わせることで紛争に焦点を合わせてみた。これからはさらに人為的な環境の変化を加味しなければならないかもしれない。

末延岑生 「ことばと教育（4） ことばの元を探る [4]」

聖書がことばに触れている部分を調べてみると、「はじめにことば（ロゴス）があり、ことばは神のところにあり、ことばは神であった。すべては神によって成った。」のであり、「神はアダムに事物に命名する力を与えた」という。また、『創世記』には「全地は同じ発音、同じことばであった。」とある。日本の場合、縄文時代には、物には神が宿るという精霊信仰があった。『万葉集』には「言霊の幸はふ国」と神授説をにおわせる。仏教は「神を立てない宗教」だといわれ、むしろ神は自己の中にあると言っていい。ゆえに、ことばに対しては西洋の

考え方と違って、醒めた考え方が持たれて来た。「ことばを実体化し形而上学を構築して、無常な事実の世界を恒常なものとして執着するところから人間の迷いが生ずる。」という。

堀内みどり 「天理異文化伝道（17） 天理教憩の家診療所〔1〕」

コンゴ医療隊は新設間もない天理よろづ相談所「憩の家」病院の医師、技師、看護婦で構成され、その第1次隊は、山本利雄医師を隊長として、1966年11月1日に日本を出発し、21日の天理教診療所憩の家開所当日から診療を開始した。当初、3カ月の予定だったが、以後継続的に約10年間医療隊は派遣され、1977年末まで続いた。

佐藤孝則 「生命論としてのエコロジー（6）「遺伝子治療」の光と陰〔2〕」

「試験管ベビー」ルイズと「クローン羊」ドリーの誕生は、直接的なDNAの人為操作によるものではない。むしろ、遺伝子治療にこそ人為操作が行われている。プリンストン大学のLee・M・Silver教授は講演で「デザイナー・チャイルド」について熱く説いた。彼の話では、近未来の社会では親の思いどおりにデザインされた子どもができるという。そして、人為操作によって、親の思いどおりに遺伝子選択された「デザイナー・チャイルド」が、あちこちの病院で生まれるという。この中には、問題はないのだろうか。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（19） 体外受精について」

このところ問題となっている先端医療と宗教倫理の問題（バイオ・エシックスの問題）を体外受精の媒介に語ってみた。これは、人の基本的課題たる誕生・性・家族等々の問題と複雑に絡み合い、非常に大きな社会的課題となりつつある。私のつたない体験（エルサレムでの国際産婦人科学会の宗教倫理シンポジウムにおける体験）を交えて語ってみた次第である。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（19） 感情の体験」

周囲の人々の振る舞いや表情を鏡として、わたしたちは、感情のコードを身につける。そのコードに従ってまわりの人々の喜怒哀楽を読み取るだけでなく、自分自身の感情を形成し、表現することを学んで行く。そうした学習の成果を通して共感を築き上げてゆくことこそ、人間と一緒に暮らして行く基礎になる。とすれば、それぞれの人間に具わった性格や気質といったものさえ、まわりの人間との関係を取結んでゆく一つの能力として捉えることができるだろう。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（18） 社会福祉とジェンダー [3]

障害者問題を、障害者と「母親」の視点から捉えてみる。両者の対立の背後にあるものは、近代日本の社会のあり方である。すなわち障害者を否定する優生思想、そして家事・育児・介護を一方的に母親（女性）に負担させる家父長制である。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（17） 医学研究の行方 [1]」

かつては人間の命を救う事が第一の目的であった医学研究が何時の間にか利潤を追いかける道具に変わりつつあり、また命をもてあそぶような方向に逸れて行っているのではないか。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る（7）」

安井幹夫 「教養としての天理スポーツ [1]」

終戦後「教養」は私たちの暮らしの中で片隅に追いやられてきた。しかし、近年再び二つの意味において「教養」が語られるようになってきた。それは大学教育における一般教養課程の空洞化と、オウム事件に象徴される高学歴者による犯罪だ。どちらの問題もその根は専門教育偏重にあるように思われ、それに対するアンチテーゼとして、教養が再登場したと言えるが、そこにおける教養は、かつてのエリート主義的教養であってはならない。それは人間の営みとそのあり方において、偏りのない知識のバランス、全体性ということの内包するものであろう。